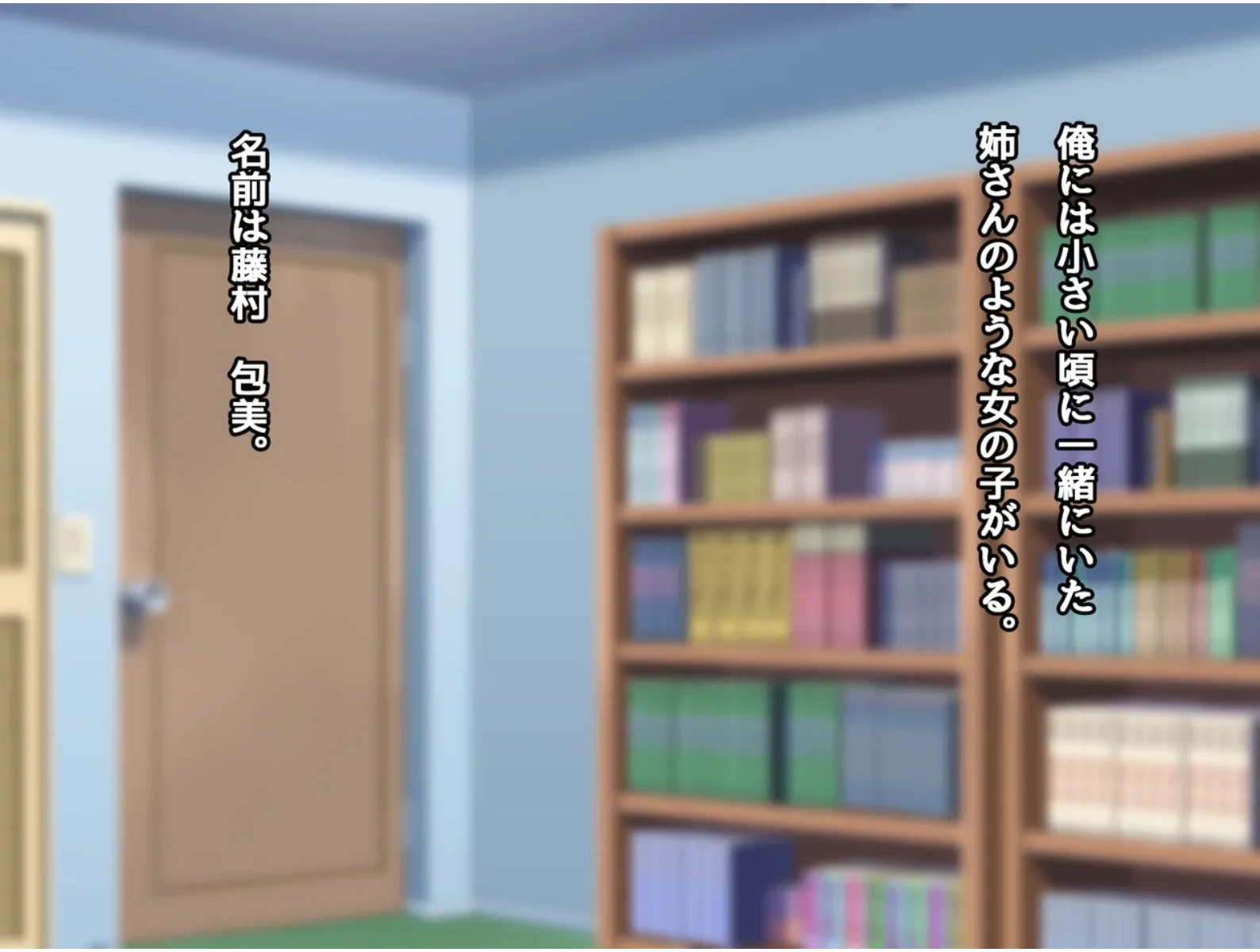
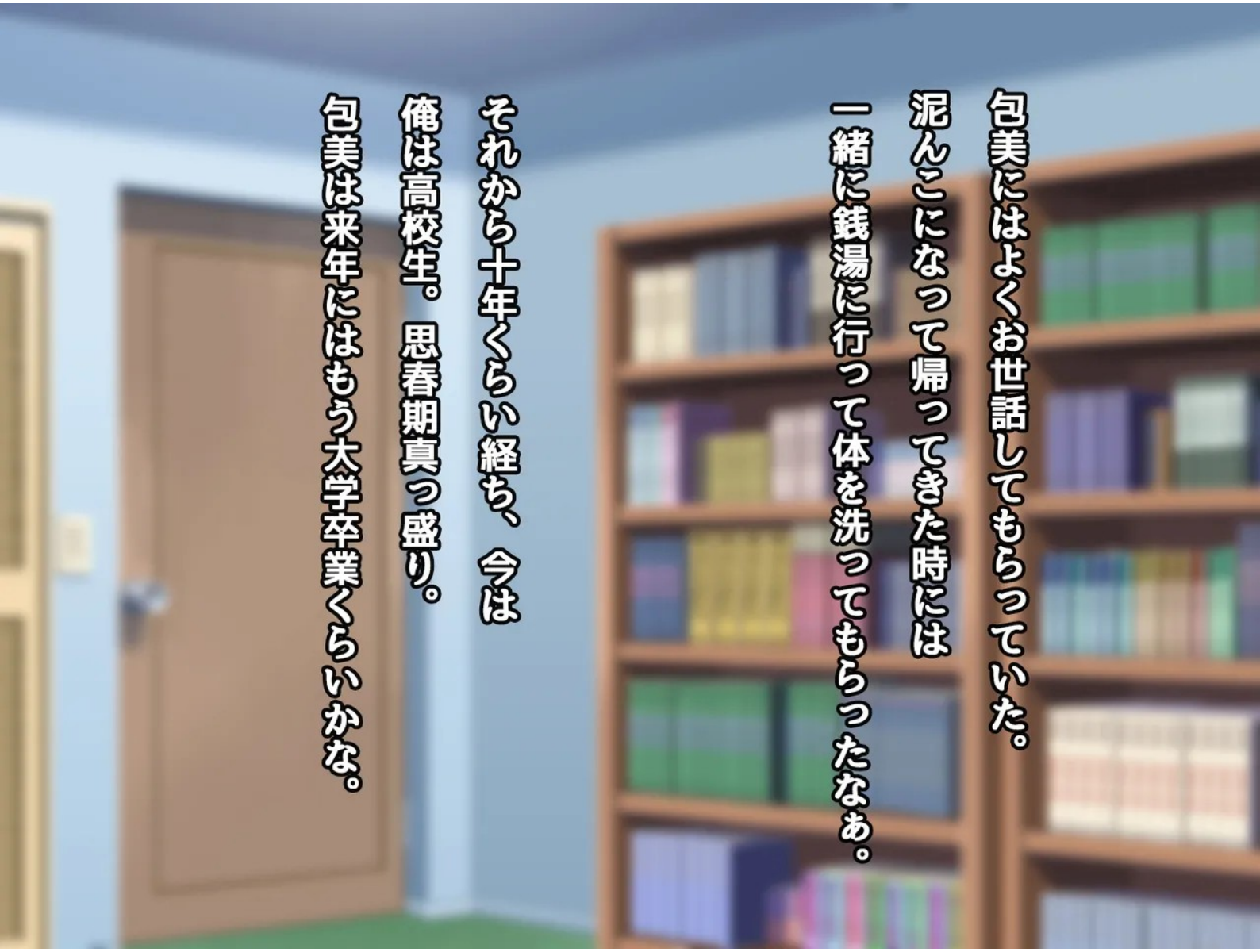
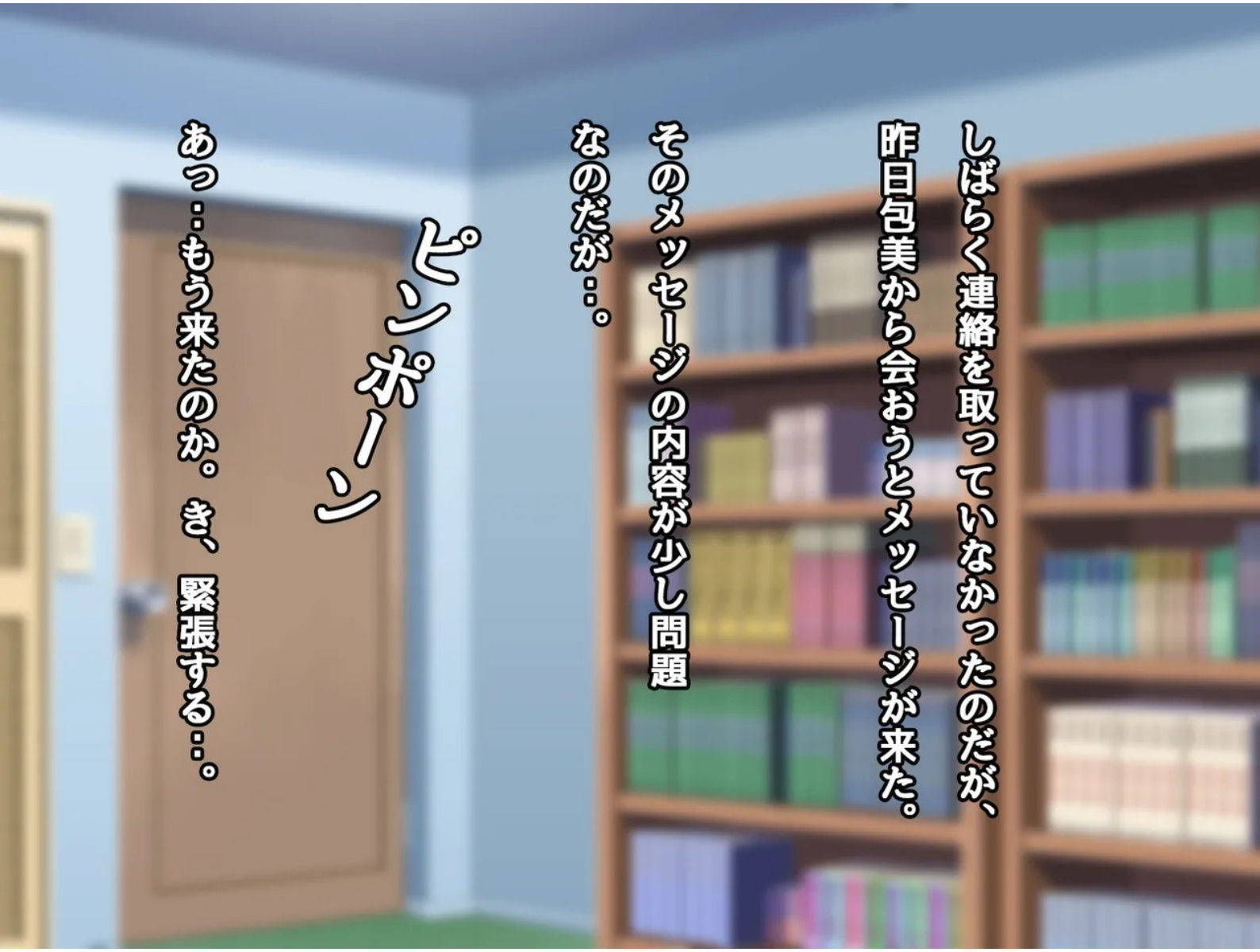

一緒に育ってきた
年上幼馴染と
身体寄せ合う
混浴SEX！？
基本CG11枚
差分込 61枚
総枚数 118枚
ドキ
年上金髪幼馴染と
秘密♡の
♡温泉SEX♡
びすけっとーん

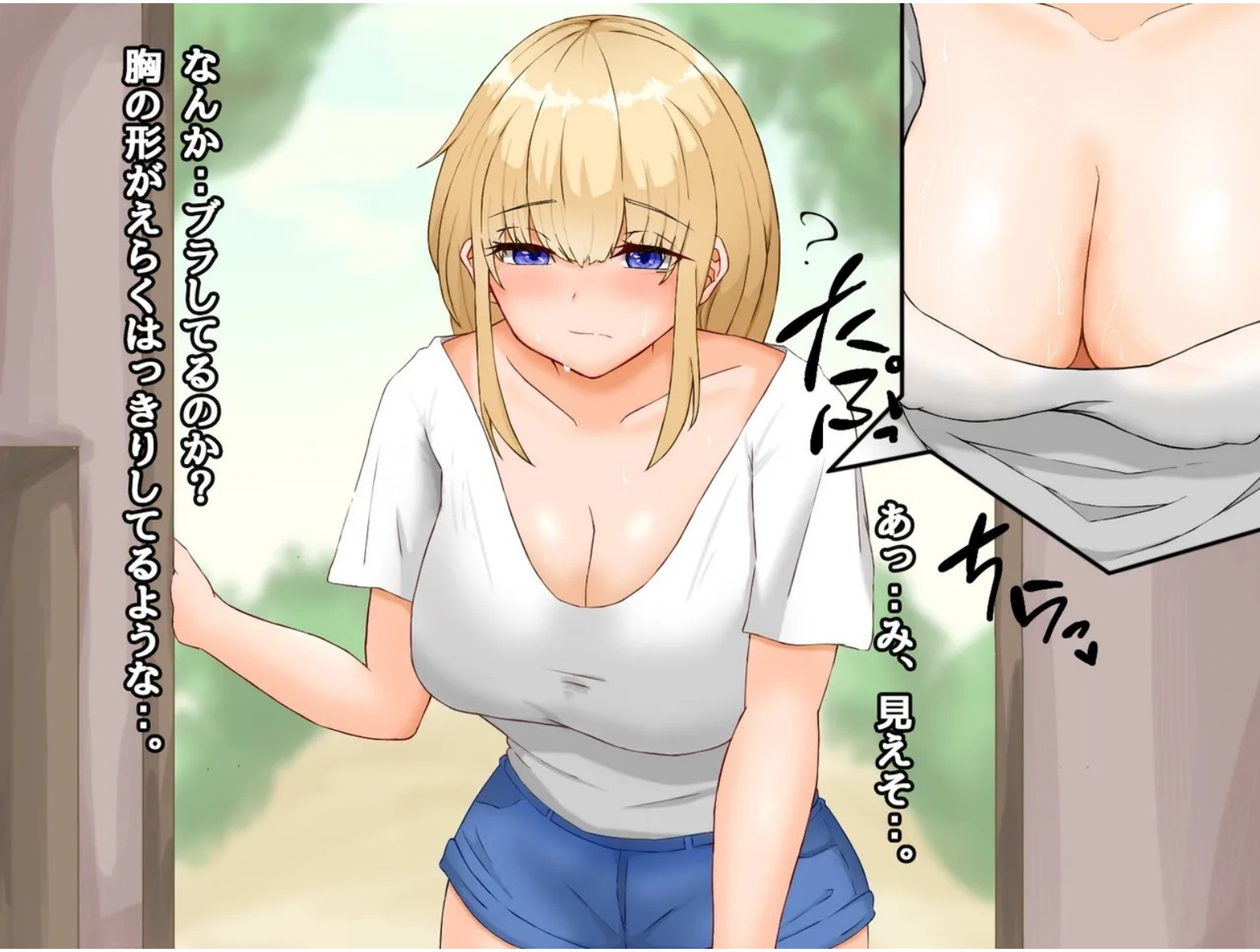

「さあ、中入ろっか。」
この状況・どうすればいいんだろう・・。
俺・・・どうなっちゃうんだ・・！？

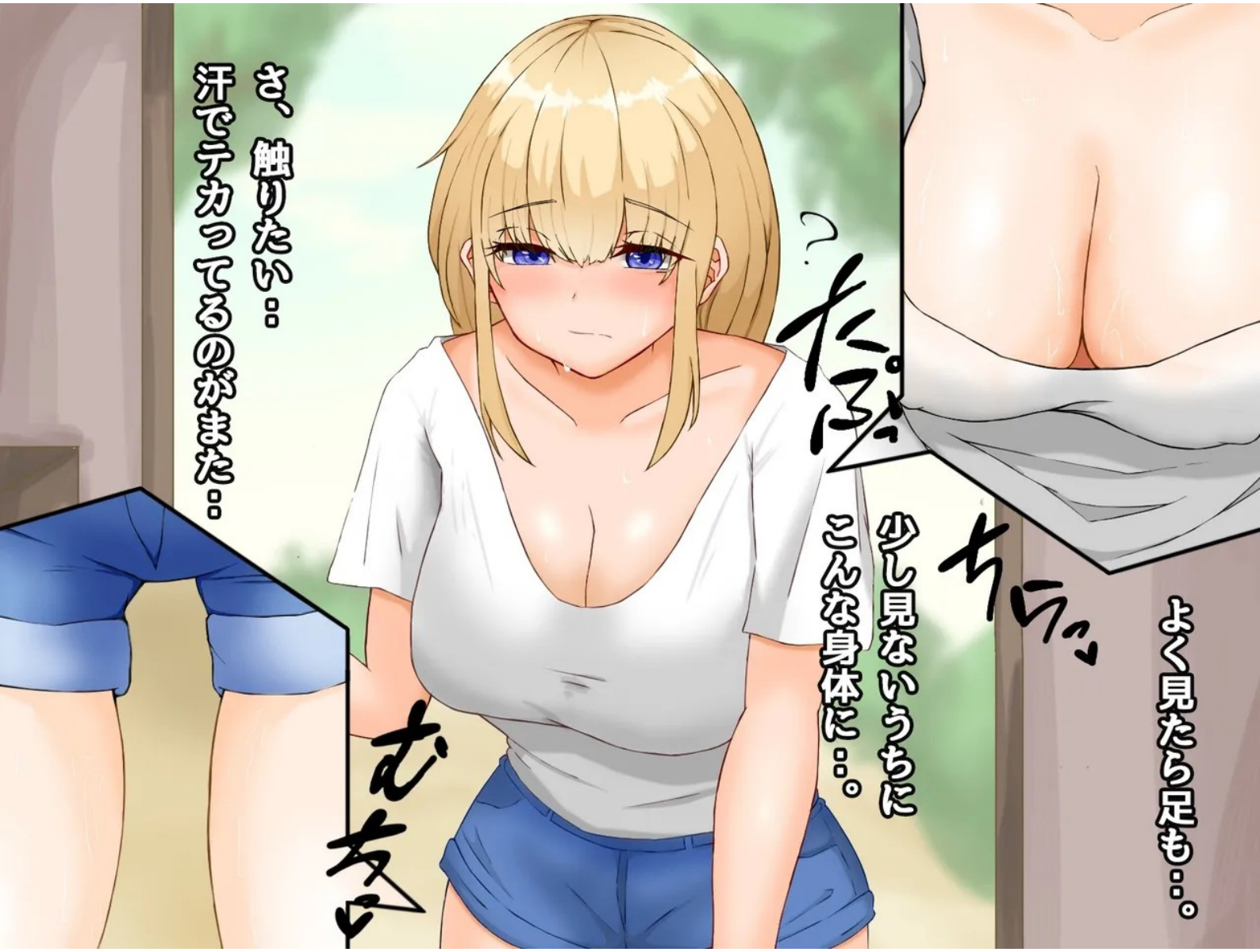

俺には小さい頃に一緒にいた
姉さんのような女の子がいる。
名前は藤村　包美。

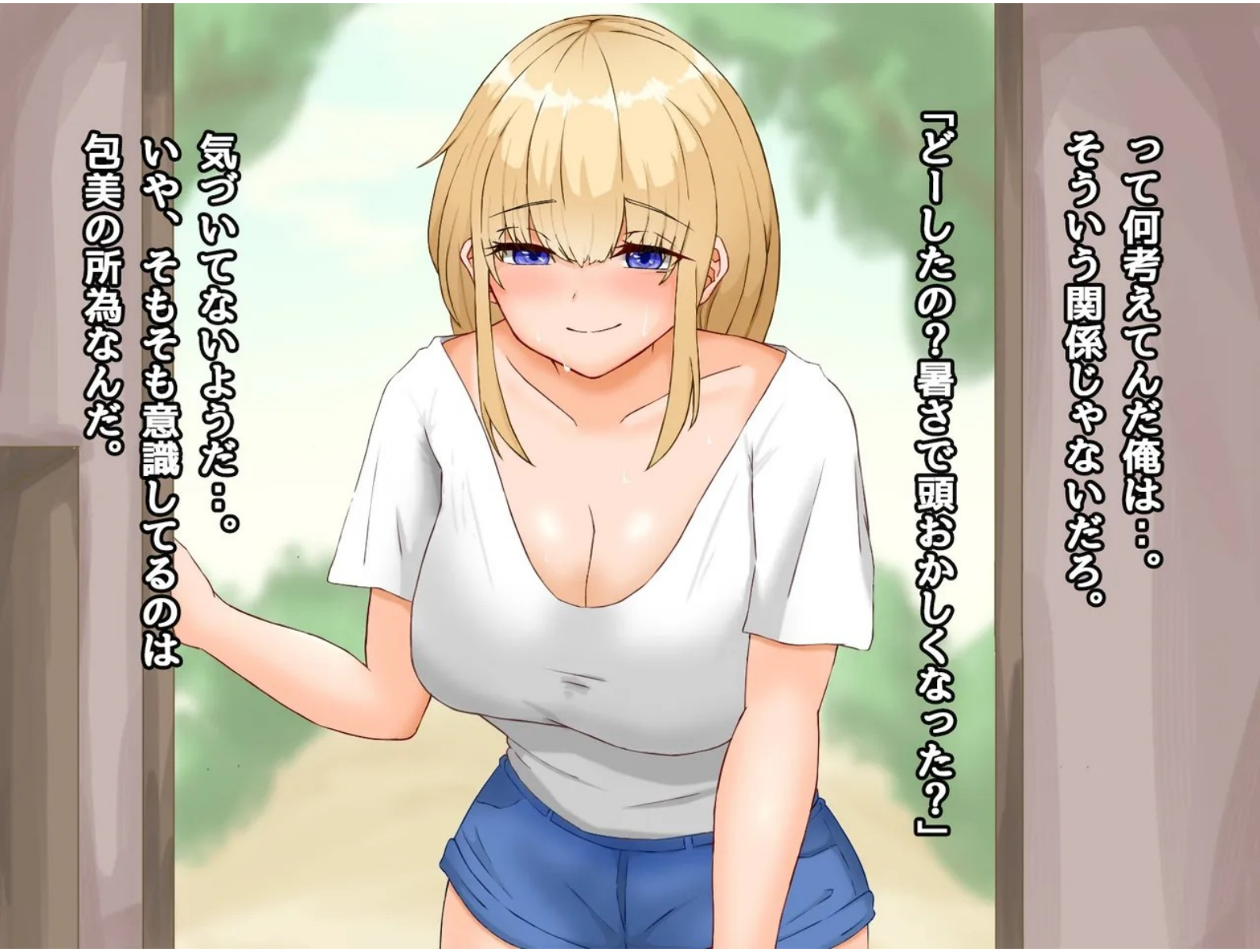

包美にはよくお世話してもらっていた。
泥んこになって帰ってきた時には
一緒に銭湯に行って体を洗ってもらったなぁ。
それから十年くらい経ち、今は
俺は高校生。思春期真っ盛り。
包美は来年にはもう大学卒業くらいかな。


しばらく連絡を取っていなかったのだが、
昨日包美から会おうとメッセージが来た。
そのメッセージの内容が少し問題
なのだが…。
ピンポーン
あっ…もう来たのか。き、緊張する…。


「はぁ…久しぶり～。外めっちゃ暑いね…。」
この人が藤村　包美。久しぶりに見たけどめちゃくちゃ可愛くなってる。
「その感じだと家でゲームばっかりしてたな～？あはは、変わらないね。」


なんか…ブラしてるのか？
胸の形がえらくはっきりしてるような…。
？
たぷ
ちらっ
あっ…み、見えそ…。


よく見たら足も…。
ちらっ
少し見ないうちにこんな身体に…。
たぷ？
さ、触りたい…
汗でテカってるのがまた…
むぎゅ


って何考えてんだ俺は…。
そういう関係じゃないだろ。
「どーしたの？暑さで頭おかしくなった？」
気づいてないようだ…。
いや、そもそも意識してるのは
包美の所為なんだ。


「は～♡涼し～♡生き返ったよ～。」
あ、あのメッセージは間違いではないのか
聞かなくては…。
「な、なあ。送って来たメッセージの
ことなんだけど…。」
「あ！そうそう！久しぶりに
昔やったように外で遊びたかったんだよ～！
付き合ってもらうからね？」
「い、いやそっちじゃなくてその後の…」


「早く行こっ！日が暮れちゃうよ～！」
「あっ！ちょっと・・！」
手を引かれてそのまま
遊びに行くことになった。
そしてそれが猛暑の中三時間続くことになる。


「はぁ～楽しかった～！汗めっちゃ
書いちゃったね～♡」
パタ
パタ
パタ
つ、疲れた…。ハードだった…。
包美運動できるからなぁ…。


ん…？！やっぱり…ブラしてないのか！？
乳首透けてないか…！？
パタ
パタ
女の子ってこういうの
意識しないのか…？
ぷくっ


「…どうしたの？そんなに見られたら
恥ずかしいんだけど…」
「ご、ごめん！綺麗になったなぁと思って…」
パタ
パタ
「な～に～？褒めても
何も出ないよ～？」
ぷにっ


「よし、汗流しに行こっか。
冷たいシャワー浴びたいなぁ…。」
パタ
パタ
「そ、そうだな。行こうか。」
ほ、本当に行くのか…。人生史上一番
緊張するぞ…。そう、これがメッセージに
あった問題の内容…


「わー！懐かしいなぁ！何年振りかな！？」
はしゃいでる包美は可愛いけど
緊張がそれを上回る。
昔から家の近くにある銭湯。
この地域は高齢者しかいない田舎のため、
混浴しかないのだ。
つまり：：：


思春期真っ盛りの男とムチムチに育った
大学生お姉さんの混浴……！
包美の身体の成長に俺の息子が反応して
ギンギンになってしまったら最後：
この関係にヒビが
「どうしたの？深刻な顔して。」
「い、いやなんでも：」


「そっか。さあ、中入ろっ！」
この状況：どうなっちゃうんだろう：。
俺どうなっちゃうんだ：！？
耐えるんだぞ：息子：！
お前にかかってるからな：！

その意気込みも
一瞬で崩れ去ることを
この時の俺はまだ知らない…。


「よいしょっと…。」
御構い無しに服脱いでる…！
視線を外してなんとか
全裸は見ずに済んだ…。
とはいえ思春期男子には
刺激が強すぎる…！
「なんか今日変だね。
久しぶりだから？」


「私もね、少しだけ緊張してるよ。
一緒だね♡」
にこっと笑う包美は昔以上に
魅力的だった。
でも、緊張していたのか…。
てっきり男として
見られてないのかと…。
「私、先入ってるね。」


ここで少し休憩して
息子を少し休めてから：
「あ。ここって確かタオル巻いて
入るのダメだったっけ。」
ん？まさか：


!!!!!
タオルで覆われていた柔らかな肌、
たぷんたぷんのおっぱい、薄いピンクの
少しとんがった乳首…。
今まで十年以上見えていなかった
彼女の秘部にとてつもない興奮が
込み上げるのを感じた。
たぷんッ♡


「少し太っちゃったんだ…
あんまり見ないでね？」
照れながら言い、浴場に行ってしまった
包美に愛しさを覚えてしまった。
なんとか興奮と息子を
抑えながら俺も浴場に向かった。


「はぁ～♡気持ちい～♡身体
動かした後のお風呂は最高だよね♡」
ぷるんっ
「そ、そうだなぁ最高だぁ…。」
最高だ…浮いてる濡れ濡れおっぱい…
はッ！まずい平常心平常心…。
こんなことしてていいのだろうか…。


包美は楽しそうだけど…
聞いてみるか…？
「な、なぁ。もしかしたらこれって
普通じゃないんじゃないか？こういうのって
カップルがやることじゃ…。」


「え～？昔から一緒に
入ってたじゃない。普通の
ことだよ～。」
そ、そうなのか…。
で、でも俺も思春期な訳だし
もう少し危機感持っ…
「ねえ…。」

「興奮…してるんでしょ？♡」
「！！！」
「実はね…私のおっぱいとか太ももとか
ずっと見てたの…全っ部気づいてたよ…♡」
バ、バレてた…！？


そう言うと包美は体を寄せ、
おっぱいを押し当て、
硬くなった乳首を
つんっと当ててきた。
「おちんちん…♡
触って欲しくてビクビク
してるよ…♡」
「さわさわしてあげよっか？♡」


「そ、それは……」
むにゅ♡
クリュクリュッ
乳首を唾液のついた
指先で弄び、耳元で
囁くように問いかける。
「あっ……誰か入って来たみたいだよ……♡」


「やば…！は、離れよう。」
「だ～めっ、ここ少し影になってるから見えないよ？」
「そ、そんなの屁理屈…」
「それにね。」
くにゅ♡


「隠れてヤる方が
気持ちよくなれるよ…♡」
自分にだけ聞こえる
ように囁く。
そう言うと彼女はモノを指先で
スゥー…ッとなぞり、熱い息を
漏らした。
シコ♡
シコ♡


「ほら…ここ…
気持ちいでしょ…？♡」
モノから全身に
駆け抜けるような快感が
身体を襲う。
びくっ
すぅ〜


「あっ…我慢汁…♡」
ゾクゾクッ
「糸…引いちゃってるね…♡」
「私ゾクゾクしてきちゃった…♡」
ヌルル
「もっとハヤく…しごいちゃおっかな…♡」

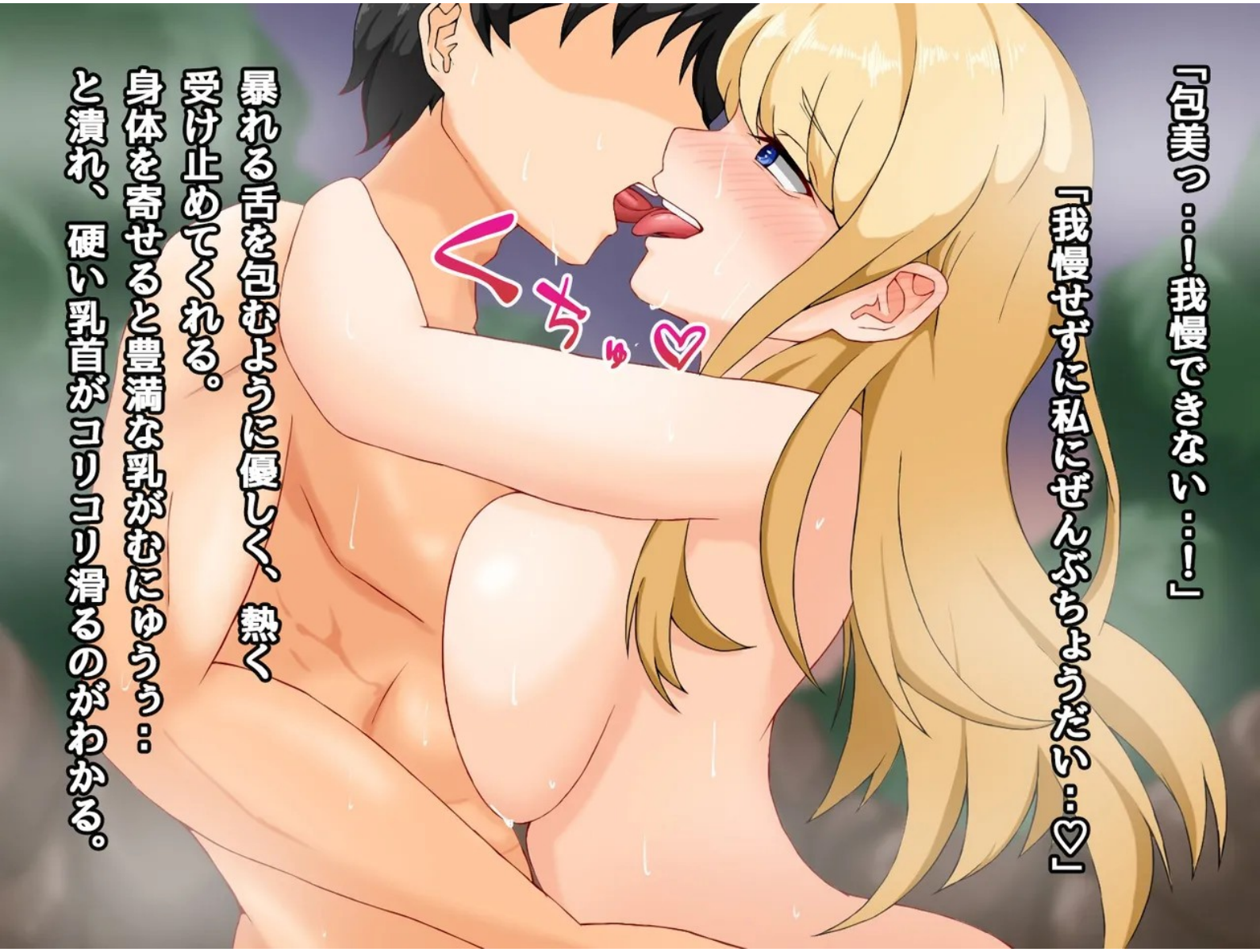

「おちんちん熱くなってきた…
あっ…我慢汁こぼれちゃう…♡」
ビクビクッ
「ぬるぬるだね…♡」
「おちんちん舐めたいな…
独り占めしたい…♡」
有無を言わせずに
ちんこに顔を
近づける。
シコ♡
シコ♡
シコ♡
シコ♡
シコ♡
シコ♡


「ずっとおっぱい見てたね。
サービスだよ♡」
汗とよだれの混ざったぬるぬるの
おっぱいで逃げられなくなる。
「これでおちんちん
逃げられないね・・♡」
たぽッ♡
むぎゅ♡


れろぉ♡
裏筋を唾液たっぷりの舌先で下から上にゆっ……くり舐る。
たぷッ♡
「待っ……それやばい……！！」
竿からおっぱいに伝うよだれの感覚にさえ感じてしまう。
たぷッ♡
たぷッ♡


「あっ、ココ好き？腰浮いてる♡」
ちゅぱ♡
ちゅぱ♡
「ビクビクッて…強くなってる…♡私にぶッかけちゃう…？♡」
「くっ…ダメだイく…！」


「んうっ…♡すごい臭い…♡
いっぱいぴゅっぴゅしたね…♡」
綺麗な顔が自分の種汁で
汚れる様に恍惚としてしまう。
ぴゅうぅぅ
ぶぴっ♡
ぢゅ♡♡
下品に舌を出して顔を火照らせる
包美…今味わえているのは俺だけ…！

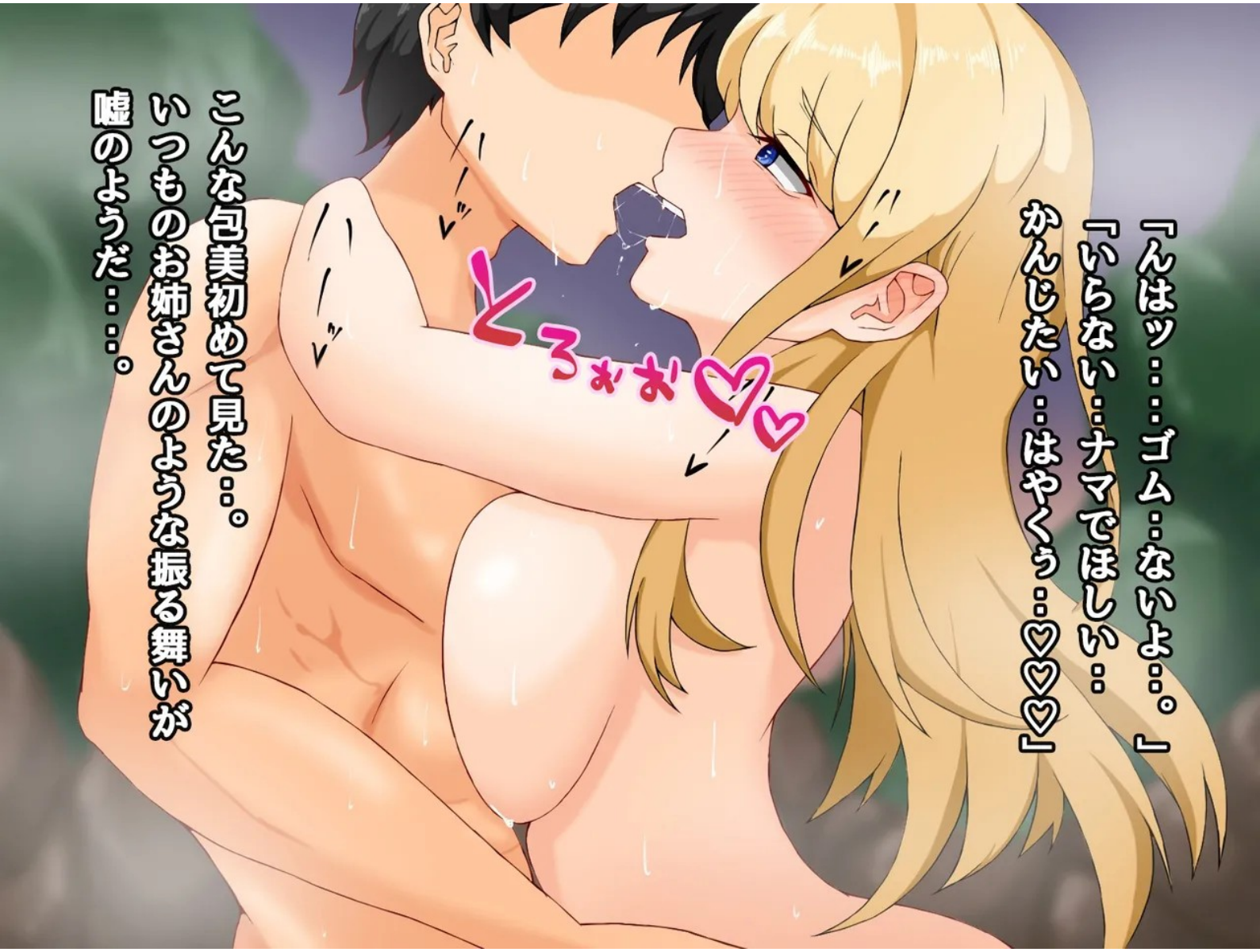

「包美っ…！我慢できない…！」
「我慢せずに私にぜんぶちょうだい…♡」
くちゅ♡
暴れる舌を包むように優しく、熱く
受け止めてくれる。
身体を寄せると豊満な乳がむにゅぅ…
と潰れ、硬い乳首がコリコリ滑るのがわかる。


「私ずっとこうしたかったの…」
「ずっと食べて欲しかった。」
おっぱいの押し付けが強くなる。
出したばかりの息子がまた脈打って
起き上がり始める。
「俺もこうしたかった。ずっと…！」
ぬる
むぎゅ♡


「れろ…はッ……くちゅ…んぁ♡」
乳首が重なり、互いを求めるようにコリコリ擦れ合う。
ビクッ
腰を激しくくねらせ、徐々にキスが濃厚に、密になっていく。
ピクンッ


「私のこと…好き？」
「大好きだ。」
「うれひい…♡」
とろん♡
「あンッ…舌吸っちゃ
やらぁ…♡♡」
「嫌なの？」
「やめちゃらめぇ…♡
もっと…もっとぉ…♡♡♡」
内に秘めていた感情が溢れる。
さっきの攻めが嘘みたいに子犬のように縋り付く。


「しゅき…すきぃ……♡♡♡」
全身をビクつかせながら言う言葉に
ギンギンになり、包美のもちもちの
股に擦り付ける。
「ソレ…ナカに…欲しい…♡」
「私…に…おちんちんで…
じゅぽじゅぽって…シて…♡♡♡」
呂律と頭が回ってないとろんとした
言葉で必死にモノをねだる。


「んはッ……ゴム……ないよ……。」
「いらない……ナマでほしい……
かんじたい……はやくぅ……♡♡♡」
とろぉお♡♡
こんな包美初めて見た……。
いつものお姉さんのような振る舞いが
嘘のようだ……。


脚を広げ、受け入れるように
愛液でめちゃくちゃになった
ワレメを開く。
とろんとした
笑顔で待つ
包美に吸い込まれ
興奮で反り返る肉棒を
あてがう。
ちゃぷ
しゃぶ


「いっぱいオカして……♡♡♡」
「わたし…あなたに……♡」
「めちゃくちゃにされたい……♡」
ぱん
ぱん
ぱん
ぐりっ
ぐりっ


びくんッ♡♡
「ッーーー!!♡♡♡♡」
「イッ…んぁッ…ッ♡♡」
包美の腰と膣が激しく痙攣する。

「まってイッたばっかあぁ♡
んおおおぉぉぉあッ♡♡」
「おかしくなっちゃうぉ♡♡
はッあッッぁッ♡♡」

「だめイクイクイクッあッ♡♡
キちゃうまたイッッッく♡♡♡♡」
「これちゃうぅうあッ♡♡」


はぁッ♡♡
びくんッ
びくッ
んぢッ♡♡
びゅるるぅう


「はッ…♡まだげんき…？
こんどはわたしが…♡♡」
「きもちよくする
ばんだよ…♡♡」


「激しいの好き…？」
「溜まってる分全部出して…！」
んッ
はッ
パ


肉のデコボコ一つ一つが
肉棒を撫で回す。
んッ
はッ
激しく弾む彼女の乳や尻、
ムチムチの肌から汗が
飛び散る。
腰のグラインドも激しくなり、
体液がこみ上げてきた。


「…私ね、今日のためにね…ッ」
「たくさん考えたの…ッ」
「どうやったら私のこと
異性としてッ…見てくれるかって…ッ」


「私、遊びじゃないよ…っ」
「もっといろんなあなたを見てみたいのっ…お」
たぽんっ
たぽんっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
「…ほんとに…一緒にいて…くれる…っ？」
「当たり前だ…ずっと一緒だ…！」


「ありがと…っ♡」
「俺の気持ちだ…ッ
受け取ってくれ…ッ！」
たぽんっ
たぽんっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
たぽんっ
ぱちゅっ
「全部受け止める…！きて…っ♡♡」


みくッ
うぅんッんあッ♡♡♡
イくぅッ♡
みく
みゅる
るる


「…気持ちよかった？」
「最高だ…。」
「また…シてくれる…？」
「もちろんだよ。」
「えへっ…よかった♡」
安堵して笑みをこぼした包美は
自分の知っている包美の中で一番
愛おしかった。


「誰も：いないよな？今のうちに身体流して出よう。」
「うん、そうしよっか。」
腕を組まれ、谷間に腕が包み込まれた。
むにゅ
「ち、ちょっと。当たってるんだけど：。」
「いいでしょ？前より仲良くなった記念ってことで♡」


「ほら、その…勃っちゃうからさ。」
「あんなにしたのに？大丈夫だよ～。」
「そんなに興奮してくれるの～？」
包美はケラケラと笑う。
「いやほんとに……って」


「あっ……。」
再び起き上がってしまった
息子を見て声を合わせる。
「…帰ったら…する？」
「…今日はもう……いや、する。」
もう少しこの甘い感情の中に
浸ることにしよう。
おわり






？
たぷ
ちらっ


？
たぷ
ちらっ
むぎゅ








パタ
パタ
パタ


パタ
パタ
パタ
ぷに


パタ
パタ
パタ
ぷに




























クリュ
クリュッ






すう


つう～…
ヌルル
すり
すり
ゾクゾクッ











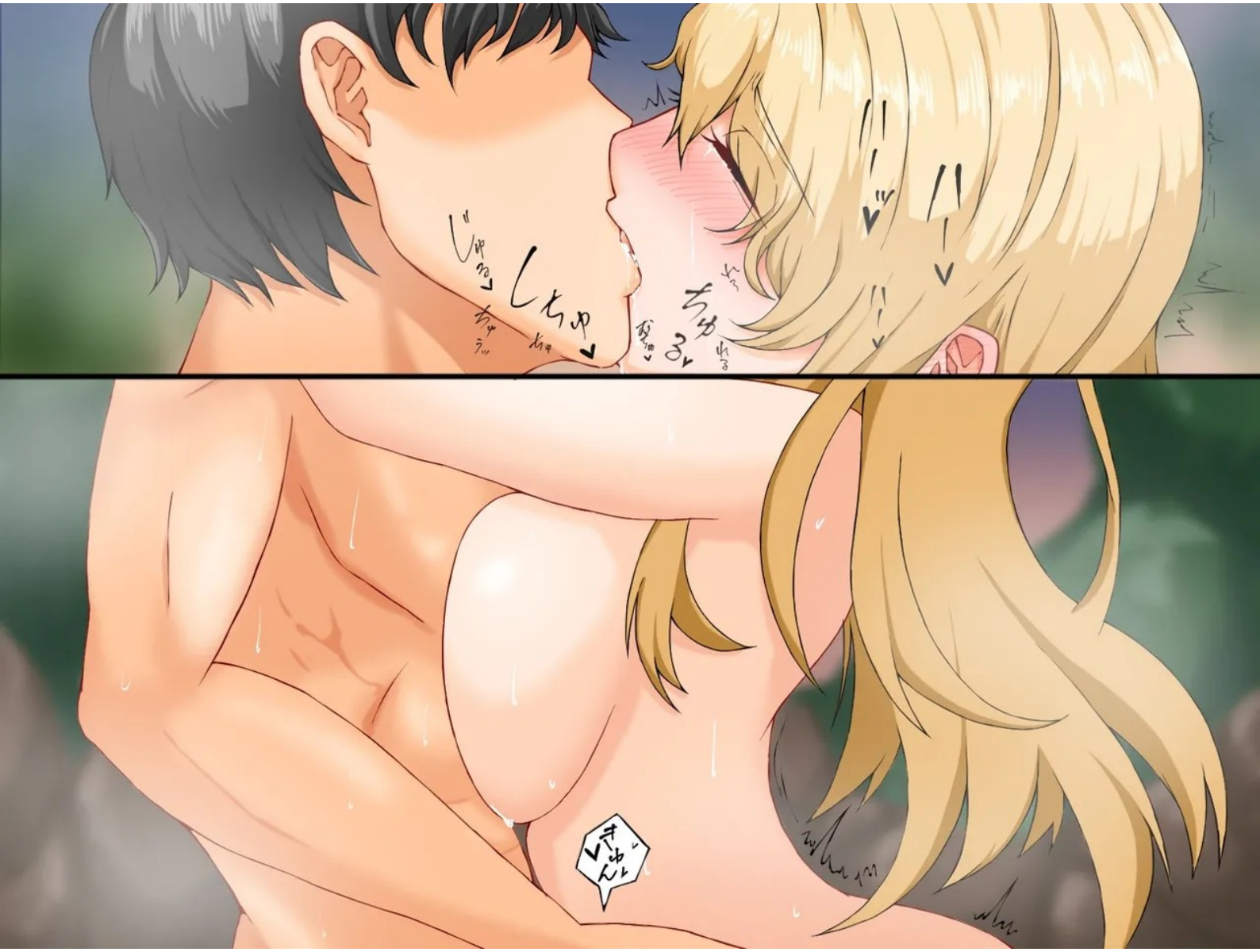







ピクッ
ビクッ


じゅる
ちゅ
ちゅ
ちゅ


じゅる
ちゅ
ちゅる
ちゅぱ
ハーハー
すぅぅん




ちゅぱ


はぁ
はぁ
はぁ


ビクビク








どくお
















むにゅ



